

近年における旧吉野川の川づくり

四国地方建設局徳島工事事務所 高崎 信三
 四国地方建設局徳島工事事務所 宮崎 泰典
 四国地方建設局徳島工事事務所 山崎 隆幸
 四国地方建設局徳島工事事務所 正〇池添 好巨

1. はじめに：近年、河川改修は従来の治水重視の改修から、景観・自然等に配慮した改修へと変化しつつあり、近年都市化の進む中、河川のもつ水辺空間は地域の憩いの場として大きな期待が寄せられている。このような状況の中、旧吉野川において地域に親しまれる川づくりをめざして行われた事業を紹介するものである。

2. 旧吉野川の概要：昭和51年に旧吉野川及び今切川の全川を徳島県から直轄編入した。管理延長は、旧吉野川24.8km、今切川11.7km、鍋川0.1kmの合計36.6kmで、旧吉野川は吉野川河口から15km遡った地点に設置された第十樋門より分派され、阿讃山脈より流下する宮川内谷川、黒谷川、大坂谷川、板東谷川等を合流し板野郡北島町高房で右派今切川を分派



位置図

し両川とも蛇行しつつ流下して紀伊水道に注ぐ緩流河川で、洪水時における流速は約1.0～1.5m/sである。その流域面積は246 km²、計画高水流量は板野町大寺で1,500 m³/s（確率1/100）の低平地河川である。沿川は徳島中心部に近いことから都市化が進み、人口・資産が集中し、今後も増加することが予想される地域でありながら、直轄編入以来、日も浅く整備水準が低い為、改修が急がれている地域である。こうした状況から、老朽護岸の補修、樋門等の河川構造物の新設及び改築を行うとともに地盤高・流域状況の調査を進め事業効果のあがる段階施行計画（時間雨量50mm対応）を策定し昭和62年度からは特定緊急事業として整備を進め、又、平成7年1月の阪神大震災を教訓に、地震に強い川づくりも行なわれています。

3. 旧吉野川の川づくり

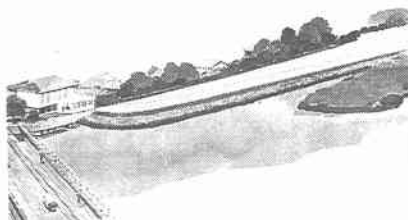
1) 勝瑞地区：当地区は、以前よりヨシが生育し、冬季にはカモ等の渡り鳥も多く見られ市街地に隣接しているにもかかわらず自然の多く残されている所である。以上のことより下記のような点に注意をはらって改修工事を行った。

①連節ブロック上面を現地の河床土により被覆し、自然景観を創出する。

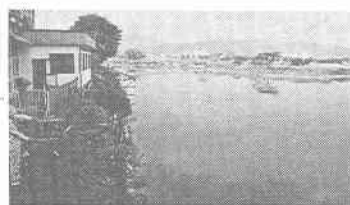
②水際部にヨシ等を移植し、植生域を創出する。



標準断面図



パース



施工前

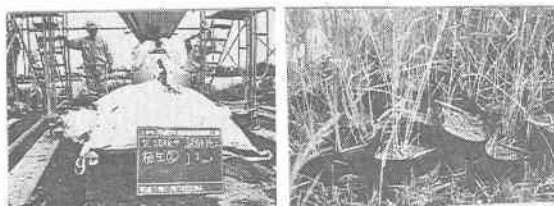


施工後（3ヶ月後）

③被覆盛土勾配を3～5割で施行することにより水際線に変化をつける。

④スポット的な巨石積により、魚巣を確保するとともに水際線に変化をもたせる。

2) 新喜来地区：当地区においては、リサイクルモデル工事として袋詰脱水工法が採用された。袋詰脱水工法とは、低水護岸施工時に発生する河床堆積物、即ち水分が含有量が多い汚泥を浚渫し、透水性の袋に詰め最終脱水後、袋詰状態のままで、盛土や護岸等に活用する工法であり、簡便な施設で軟弱な土を再利用する事が出来ます。今回の施工では、多自然型機能回復も念頭において、袋の材料に植物の根を通す特殊な素材を活用し、現場に群集しているヨシ等の植物を採取することにより、周辺の自然環境や生息する魚類・鳥類等の生態系にも配慮した工法としています。また、根固工として使用する袋詰玉石工も、リサイクル工の1つで玉石もしくはコンクリート塊を特殊なネット内に入れてリサイクルをはかりました。



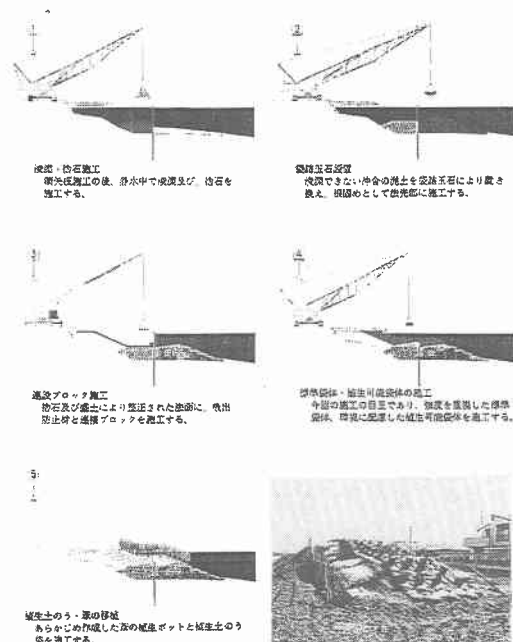
袋詰脱水袋体製作状況

ヨシポット苗養生状況

3) 加賀須野地区：当地区の堤防は、高さが低く、老朽化が進み大きな洪水が発生すると護岸の決壊や流失、大切な家屋の浸水等重大な被害の発生が危惧される地域です。百手堤防では、パラペットの壁面に徳島県の地場産業である大谷焼きをもって、21世紀の当地区を支える子供たちの手形の記念プレートを埋込み、背後地には、緑地を設け堤防天端をポケットパークとして整備する等、地域の人々の憩いの場となるよう配慮しています。また、河原樋門は、ゲート进行操作する部屋を周辺の景観に配慮し、地域のシンボルとなるよう大正12年に造られた第十樋門の水位塔を模して造りました。

4. おわりに：今回紹介した事例は、近年に旧吉野川で実施された、多自然型川づくり、環境整備事業の状況であるが、まだ記憶に新しい阪神大震災による淀川堤防の崩壊をふまえ、地震に強かつ環境にも配慮した工事を施工中であり、今後新しい事例が紹介できると思います。

袋詰め脱水処理工法説明図



標準断面図

